会社の雰囲気を１W（ワット）明るくするコミュレポ

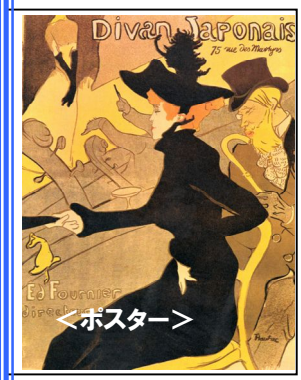
エックスパートナーズ　丹羽　浩之

皆さん、こんにちは。私は、コミュニケーションについての気づきを毎月１回、振り返ることにしています。せっかくなので日頃お世話になっている皆さんにもシェアできればと思いこのようなレポートを記述することにしました。ご笑読頂ければ幸いです。

「斜に構える」ことで見えること

先日久々に、友人が経営するバーに行った時のことです。

そこには、私にとっては、見覚えのある絵やポスターがところどころに飾ってありました。それは、１９世紀末の華やかなパリの闇を照らしたロートレックの絵でした。



＜ポスター＞

ロートレックの絵は劇場やキャバレー、娼家で働く人目に触れる女性がモデル。決してそれらの女性達を美しく描くのではなく、無表情さ哀愁さ・・・をデフォルメして描いた画家です。表情からその心情や素顔を鋭くあぶりだしている感じです。

さてこのロートレック、フランスでも有数の貴族の出でありながら、幼少期の怪我で下半身の成長がとまって異種奇形的な体形となってしまいました。つまり、画家には珍しくお金に不自由することはないが、異性に対して強烈なコンプレックスを持った人間だったと思います。

この彼のコンプレックスこそが、パリの華やかさという光に隠れた「陰」を鋭く描きだしているように思えました。コンプレックスは、ネガティブで、何でも必要以上に「斜に構えた」モノの見方をしてしまう･･･

“よくないもの”のようなイメージがあります。

＜ロートレック＞

彼の描いた絵も一種の「斜に構えた」視線の絵でしょう。

しかし、彼の絵が、現在なお、共感をもって受け入れられていることは、私に自信を持たせてくれます。

なぜなら、私も「斜に構えた」モノの見方をすることがあるからです。

＜油彩＞

そして「斜に構える」ことで見えてくる真実もあると感じているからかもしれません。

しかし何事もバランスが大切。

度が過ぎれば、場を白けさせ、周りからも嫌われてしまいます。

ロートレックは、コンプレックスを上手にコントロールし、自身の芸術へと昇華させていったんだろうか･･･。

そんな思いにふけった夜でした。